

福山市の一水路に見る

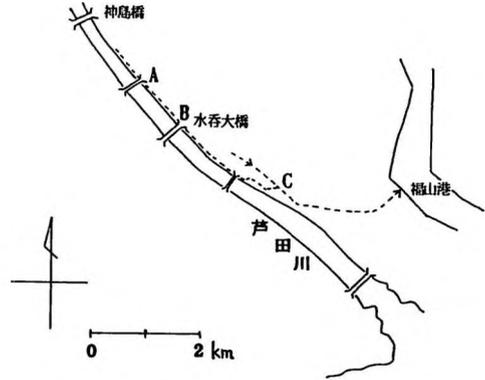
クロモとミズオオバコの群落

橋本卓三

福山市の芦田川沿い、草戸町から新涯町にかけて古い排水溝があり、筆者が近くに住んで3年以上になるが、毎年盆頃から秋おそくまでたくさんのミズオオバコの花が見られる。この溝は秋から春にかけては水の流がほとんど無くて汚水が浅く溜っているのであるが、田植え頃から秋にかけてウキクサ類の浮かんだ水田排水が多量に入り、かなりきれいな緩い流れが生じてクロモやミズオオバコが一勢に繁茂して来るのである。

1987年8月15日に全流域を見て回った。排水溝は図のA地点から上では草が密生して、やがて溝も消失するのであるが、Aから下流のC地点にかけて幅2m足らず、水深0.3m程(増水時0.5m以上)の緩やかな流れが見られた。兩岸には流れに接して湿生雑草が生育し、砂泥の堆積場所では溝をほとんどふさぐまでに繁茂している場所も見られた。AからB地点にかけてはクロモが密生し、一面に繁って底の見えない所もあり、花は少ないものの多数のミズオオバコが見られた。BからC地点に向かってしだいに流れが衰え、水もやや汚れてクロモの密生度は低下して来るが、ミズオオバコはさほど減らずに個体はむしろ大きくなって花がかなり見られた。C地点で別の下水溝が合流して水は大変に汚くなり、水流もほとんど無くなる。合流点付近ではミズオオバコとクロモの個体が散見されたが直ぐに消失した。9月15日に再び観察したが、溝の掃除が行なわれており、B地点のやや下流の一部でクロモと混生するミズオオバコに多数の開花が見られた以外は見るべきものは無かった。

福山には昔から芦田川より引水するいくつかの用水路系があり、この中には17世紀初頭に上水道として造られたものも含まれている。ここで述べた水路はかつてそうした灌漑施設の一部であったのだが、1960年代の用排水路分離工事でC地点付近までの旧水路がコンクリート隔壁により二分され、用水路のみがここから北上する様に変更されたために排水溝として残ったものである。そして、この排水溝は地元の人の話では70年代の終りまではA地点付近にあったいくつかのメッキ工場を中心とする排水の流入により魚や水草の生育し得ない着色した水域だったそうで、その後芦田川河口沖の埋め立て地に当該工場が移転したりして徐々に現在の様な姿に戻って来た



ものの様である。なお、市内の用水路では一部底泥のある場所にクロモやエビモ等の群落が見られるものの、多くはコンクリート底であって所々、砂礫の溜り場にエビモが散見される位である。

この地域は1985年頃から順次、流域下水道の新設供用に伴う水洗便所化が推進されており、この溝も旧来の雑排水溝としての役割を失いつつある。今後とも周辺地域で水田が減少し宅地化が一層進行して行けば、雨水排水路として浚渫や掃除が定期的に行なわれる様になると予想され、「ゴミ」としての水草群落が今まで通りの存続を見る事は難しいのではないかと思われる。

○滝田謙譲著『東北海道の植物』(カトウ書館、昭和62年5月、1116頁、10,000円)

北海道東部にみられるシダ植物以上の植物1100種あまりのスケッチに簡略な説明をつけた植物誌である。著者は中学校の数学教師。土曜と日曜に採集した材料を、早朝から出勤前と仕事から帰ってから夜寝るまでの時間、毎日スケッチを続けて完成した努力の結晶である。1種を描くのになくとも2時間、手間のかかるものだと5~6時間かけたということからも、いかに精魂こめた力作か伺い知れる。このような書を自費出版同然の形で世に問われた著者に敬意を表したい。

水草もしっかりと調べられていて、道東の水草を知る上でおおいに参考になる。一部の図鑑で北海道西南部にしか産しないとされるフサモが釧路地方に産することもこれでよくわかる。イトイバラモの図も、全体図がぎこちないのが残念だが、一般書に描かれるのは初めてではなかろうか。

なお説明文には、種小名の意味がふれてあるが、誤りがいくつかある。例えばエゾミクリ("emersum は風土